

---

# The possible world

田無 兼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The possible world

### 【Nコード】

N9151Z

### 【作者名】

田無 兼

### 【あらすじ】

近未来、とある理由によりVR技術の発展した世界。

人は自らの技能すら売り物とし、世界中で日夜売買が行われていた。そこに現れた最新のVRMMOゲーム、「The possible world」

脳内インストール型スキル制を売りとしたこのゲームはまたたく間に世界中で大人気を博していた。

それから2年後、一人の大学生が新たにゲームの世界に入る時物語は始まる。

これは、近未来のネットゲを遊ぶ人々を描いた日常形小説である。

## 0 話

近未来

認知心理学、人間工学等の様々な分野からのアプローチにより、VR 技術を用いた技能学習方法が実用化された世界。

仮想空間であるVR世界に於いて技能学習を行うと、高効率でその技能を習得出来る。

このような内容の論文が発表されると、世界は一斉にVR技術に目を向け始めた。

そして、様々な問題がありつつも人類はその課題をクリアし、仮想現実による技能学習が一般化され始めた頃、更に新たな論文が発表された。

技能データの脳内インストールによる技能学習法、という論文である。

VR技術が発展していく中で、人は脳のメカニズムを次々と解析していった。

この論文は人の技能学習法の到達地点、技能を直接脳内にインストールし技能を学習させる方法について論じていた。

人々は色めき立った。

自分たちはやりたい事があればその方法を即座に手に入れ、することが出来るのだ、と。

しかし、これには1つの問題があった。

肝心の技能データの取得方法である。

技能データを得る方法は1つだけ。

人間の脳からその技能データを抽出するというものであった。

これの何が問題なのか？

脳内からデータを抽出する際に危険が伴うのだろうか？

そうではない、問題はデータを抽出すると抽出された者からその技能が喪失されてしまうこと。

そして、その抽出されたデータがコピーするたびに劣化していく事である。

だが、それでも好きな技術を極めて容易に習得する事を可能とするこの方法は世界で即座に研究され始めた。

数年後、この技術は確立され世界に広まった。

そして、技能データの市場化が始まったのである。

人々は金で技能を買い、また技能を売って金に換え始めた。

しかし、技能データには限りがあり、データには莫大な値段がついた。

そこで、世界の目は仮想現実での技能学習に向かった。

仮想現実には様々な技能の習得場を用意し、技能を習得し売買を行う。新しいビジネスの形がそこにあった。

そしてその形は次々に広まっていき、それは当然娯楽にも向かった。

VRMMO。

VR技術が発展し確立されたゲーム体系。

そこに登場した最新にして最高の人気を誇るゲーム。

その名はThe possible world。

脳内インストール型スキル制を導入したVRMMO。

これは、そんな近未来における少し変わったネットゲを遊ぶ人々の物語である。

## 1話

「暇だ」

目を覚まし、30分程ぼうつとしたあとそうつぶやいた。  
更に5分程そのまま動かずにいると腹の虫がなった。  
その音を聞いたとたんに腹が減った気がしてくる俺の頭は、かなり都合良くできているようだ。

身を起こし、ベッドの足側に配置された冷蔵庫のドアを開け中身を見ると調味料ぐらいしかない。

「そうか…昨日の夜にやけ食いして全部喰っちゃまったんだっただな」  
昨日はバイト先に顔を出して辞めると言ってきたのだった。  
長く勤めていただけに辞めるのには抵抗があったのだけど、さすがにあんなへマをしてしまうとバイト先には居られない。

「結構給料良かったんだけどなあ」

愚痴りながら部屋備え付けのキッチンまで歩き、炊飯器の中身を確認するとまだ白飯が残っていた。

「よしー」

少しテンションが上がり、冷蔵庫からバターを取り出しスプーンですくいフライパンに乗せ、火をかける。

バターをフライパンいっぱい溶かしながら広げ、ご飯を投入。

ご飯の上に塩こしょうをふりかけ、しばらく炒めた後に醤油を入れる。最後にもう一度炒めると特製醤油バターライスの完成だ。

「男が作る適当料理だよな」

苦笑いしながらも香ばしい匂いに食欲がそそり、いそいそと皿に盛りつけテーブルへと持っていく。

「いただきます」

両手を合わせつつぶやくと、早速右手にスプーンを持ち食べ始める。食べながら、左手を軽く振ると左手首のDデバイスが光り、左手の先に長方形の立体スクリーンが現れる。そこに左手の人差し指を這わせ、画面をスクロールさせニュースのアプリを開く。

「今日も特に気になるニュースは無い、か」

その後はネットブラウザを開き、いつも見ているサイトを巡回していく。

「しかし…便利なものだよな」

食事を終え、音楽アプリを起動させながら本格的にネットサーフィンを始めた時、ふと思いつ。

今の世の中はDデバイスがあればたいいの事ができてしまう。勿論料理などは無理だが、かつてはPC、携帯電話、ゲーム機等電子機器の類は全てが集約されてしまった。

といっても俺自身はそれらが別々だった時代をあまり覚えていないのだが。

画面から目を離し、自らの手首にある物を見る。

Dデバイス 正式名称は違うはずだが、世間的にはそう呼ばれている機械だ。

電子機器の類のほぼ全てが集約され、更にはVRダイブを行うために無くってはならない物。

VR技術が発展し、各種VR製品を使用するためには必要不可欠であり、全世界でほぼ全ての個人が所持しているといわれているが「実際どんなもんだか。この時代にだって電気を使わない生活してる人も居るって聞くしな」

まあしかし、少なくともこの日本では全国民が所有していると言っても嘘にはならない。

なにせ、今やこれで口座の確認や買い物支払いなどを行えるし、個人判別も行えるので最高峰の身分証明にもなる。免許等もデータで呼び出せるので免許不携帯になる心配も無しと素晴らしい物だ。

常に身につける事が習慣化しているため盗まれる事もないし、DNAによる識別があるので他人の物を使う事もできない。最早良いところしかないように思えるが、面倒くさい事もある。

Dデバイスが頭部、両の手首、腰、両の足首の全てにつけなければいけない物だからだ。

「けどまあ仕方ないよなあ」

これも全てはVRダイブを行う際に身体データを取得するために必要なのだという。

そう言う事もあり、Dデバイスは今では世界中で生産されている。企業により色々の違いがあり、Dデバイスの選び方でセンスを問われる事もある。

俺の場合は実用性を取り、日本製の通信速度とデータ容量に特化

したモデルを選んでいる。デザインは黒字にメタリックブルーの線が入った物だ。ちなみに一月のデータ通信料金は5000円である。

「あ…そうか、こいつの金も考えないと駄目だな」

本体はともかく月々の通信料金、そしてこの部屋の家賃に生活費。今までは全て自分で払ってきた。

その為に結構な時間をバイトに費やし、貯蓄も殖やしてきたのだが…そのバイトは昨日辞めてしまったのだ。

「貯金は…50万か」

銀行口座をチェックし、考え込む。

これだけあれば2ヶ月は大丈夫なはずだ。となれば、その間に新しいバイトを見つけなければいい。幸い今は夏休みが始まったばかりであり、時間はいくらでもある。

「しかし、それで良いのか？」

大学に入って2年目の夏。1年目はバイト三昧だった。来年からは色々と忙しくなるだろう。何かやるとしたら今しかないんじゃないか？

「ふん、ばかばかしい」

一瞬頭に浮かんだものを気の迷いと一蹴する。

今の時代、技能インストール学習法が広まったこの時代ではとにかく金を貯めるべきなのだ。金さえあれば何だってできるようになるこの時代では。

しかし、しばらくバイトをする気になれないのも確かではあった。

失敗という物は思う以上に身に伝わる。

気晴らしにネットサーフィンを続けていると、興味を引かれる広告を見つけた。

「目指せ一攫千金、開拓者求む…何だこれ？」

随分と大々的な広告だった。

美男美女が左右に立ち、船に向かって手を向けている絵に大きな文字で誘い文句と共に書いてあるものがあつた。

「The possible world…そうか、こいつが噂の  
ネットゲか！」

『The possible world』  
VRMMOといわれるゲームの1つだ。

VRMMOというのは、VR技術の発展により可能となったVR製品の1つで、まあ簡単に言えば仮想現実で行われるネットゲである。確かThe possible worldは2年前から始まつたはずだが、俺はあいにく受験とバイトで縁がなかつた。

ただ、今あるネットゲの中で1番人気があるという事だけは聞いていた。ネットゲに触れない俺がその噂を目にする程なのだから、よほど人気なのだろう。

「なになに、2年連続ユーザー満足度全世界1位、総プレイヤー人口全世界1位、他色々あるな…ん？」

ざっと説明を流し見していると、見慣れない単語が飛び込んできた。

「全世界初、脳内インストール型スキル制を採用。身につけたスキ

ルを売って君も一攫千金を目指せ、か」

脳内インストール型スキル制とは初めて聞く単語だ。だが何となく分かる。これはきつと現実と同じなのだ。

身につけた技能を売り買ひする。今の世の中ではそれが可能だ。

理屈は知らない。大事なのはそれが可能という現実だ。

医者になる方法は最早医学部に入るだけではなくなった。

医者としての技能データを買ひ、脳内にインストールすることで、人は試験のみで医者になる事が可能になったのだ。

だが、技能データは有限だ。それゆえ市場では秒単位で値が変わる。

需要と供給を見極めれば、自らの持つ技能を売りさばく事で億万長者になることも夢ではない。

つまりはこのネットゲもそうなのだ。ゲーム内で技能を磨き、それを売る事ができる。

そして上手く売りさばけば

「一攫千金つてわけだ」

ゲームの舞台はファンタジー世界での未開大陸。プレイヤーの目的はその開拓。

ゲームシステムの詳しい内容はゲーム開始時にインストールしてくれる、と。

悪くない。気晴らしになり、更に上手くいけば儲ける事もできるときたもんだ。

何故かは分からないが、かなり乗り気になってきていた。

気が変わらないうちにユーザー登録だけでもしておくでしょう。

まずは名前だな。

飛渡  
翔一  
つと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9151z/>

---

The possible world

2011年12月29日02時52分発行